『ジョン・バーリコーン』と「白い論理」

芳川　敏博（京都府城陽市）

Ⅰ　はじめに

『ジョン・バーリコーン』という作品は、ジャック・ロンドン（１８７６～１９１６）によって３７歳のとき（１９１３年）に出版された。「ジョン・バーリコーン」とは、「アルコール」のことを意味している。この作品には飲酒体験が自伝小説風に語られており、禁酒法制定の先駆的役割を果たしたが、この作品の本当のテーマは「ロンドン自身の魂の救済の叫び」であると思う。

ロンドンの作品は、最初の章に作品の真のテーマを含む表面的なテーマを提供し、その後、表面的なテーマが興味深く刺激的に展開され、最後の数章で、真のテーマが深く扱われる場合が多い。この作品も例外ではない。その作品の後半には、「死」を意味する「鼻のないやつ」という造語や、「アルコールの影響により、人生のいっさいが意味のないものに見えてきて、人間の存在意義を否定する極度の悲観主義」、つまり、悲観主義と死を意味すると思われる「白い論理」という造語が見られる。冒険と飲酒体験という、単に表面的な体験を語っているのではなく、内面的な苦悩もリアルに描写しており、ロンドンという人を理解するうえでも非常に重要な作品である。

このエッセイでは、ロンドンがいつ頃から、なぜ病的な精神的苦悩を体験し、その苦悩がどのように深刻なものとなり、それに対処していったのかということを、「白い論理」という視点から、この作品やロンドンの経歴を分析することによって解明する。そうすることによって、この作品が現代の人々に与える「現代的意義」を明確にしたい。

Ⅱ　ロンドンと「白い沈黙」

「白い論理」のもとになる悲観主義、すなわち、「白い沈黙」はロンドンが２７歳であった１９０３年に始まり、２９歳の１９０５年まで続いたと、マクリントックは１９７６年発行の *White Logic* という書物のなかで述べている。この時期は、まさにロンドンの人生の「黄金期」の始まりであると思われる。（１９０３年：チャーミア

ンとの恋愛関係の開始。代表作である『野性の呼び声』や『どん底の人々』の出版。１９０４年:『海の狼』の出版。１９０５年：永住の地のグレン・エレンの山中に広大な土地を購入して定住し、生涯の伴侶であるチャーミアンと結婚。大学連合社会主義協会の初代会長に選ばれ、講演旅行をする。）この時期には度重なるパーティのために酒も主体的に楽しみ始めるが、ジョン・バーリコーンの影響から一種のむなしさも味わっている。

なぜ、ロンドンがこの時期に悲観主義に陥ったのかは、ロンドンのそれまでの生き方を考察する必要がある。彼は、自分の社会や環境における存在意義を常に優先して考え、血液を躍動させるように社会や環境に対して闘いを挑んできた。まさに、「赤い論理」の時期であったのである。このことは、彼の代表作である『野性の呼び声』の中で、犬のバック（ロンドンの分身と考えられている）が厳しい自然や人間社会の掟と勇敢に闘っていることからも分かる。

辻井栄滋氏は、『地球的作家ジャック・ロンドンを読み解く』の「*John Barleycorn*―酒と冒険の自伝的物語を読む」の中で「貧困のそこからはい上がり、望みのものをほとんど手にしたにもかかわらず、いや、そのために余計に見えなかったものが見えるようになり、そうした長い病を得ることになったのである」と逆説的に分析している。

また、この時期はロンドンにとって、「黄金の時期の始まり」であると同時に「精神的な憂うつの始まり」でもあった。（１９０３年：最初の妻であるベスとの別居。イギリスの首都であるロンドンに潜入して、格差社会の現状を体験。彼はまた、チェイニーに父であるという確認を求めたが応じてもらえなかった。１９０４年：日露戦争の特派員として派遣されるが、逮捕されたり強制送還されたりする。１９０５年：第一次ロシア革命における武力弾圧に強い関心を示す。社会党から再度オークランド市長に出馬するが落選する。）

Ⅲ　ロンドンと「白い論理」

１９０６年（３０歳）から１９１０年（３４歳）は、ロンドンがやっと「白い沈黙」である悲観主義から脱出し、社会主義活動や農業経営の拡張、自ら設計した『スナーク』号での世界旅行、その途上における『マーティン・イーデン』や「ひと切れのビフテキ」の

執筆、豪邸の建造着手と、生きいきと自らの存在意義を確認するような時期であった。特に航海中は禁酒であったので、酒の影響による悲観主義も基本的にはなかった。

しかし、この時期にあっても、極端な悲観主義である「白い論理」の芽は生まれ始めていた。（１９０８年（３２歳）：負債整理のために世界旅行からの一時帰国。世界旅行の途中で病気になり、入院する。１９１０年（３４歳）：当時２５歳のシンクレア・ルイスから短編小説用の構想２７本を買う。チャーミアンが女児を出産するが、赤子は３日後に死亡。）

そして、「ついに１９１１年（３５歳）から１９１２年（３６歳）には、酒を自ら過度に求めるようになり、その結果、悪夢や不眠症に悩まされる。さらに、腎臓病などの痛みを緩和するために頻繁に深酒をするようになり、ついには、いわゆる、「白い論理」という極度の虚無状態に陥った」と、Andrew Sinclair は１９７８年に述べている。そして、１９１２年にチャーミアンが流産したことも、彼の「白い論理」状態に拍車をかけるようになったことが想像される。

この作品が出版された１９１３年には、ロンドンは世界で最も高給取りの作家になっており、どん底から這い上がってきた彼にとって、ジョン・バーリコーンの影響を受けて精神的に落ち込む度合いも大きいものとなった。１９０９年に出版された一流の作家を夢見る彼の青春時代の自伝的小説である『マーティン・イーデン』には、主人公が労働階級から上流階級に登りつめたとたんに、上流社会の醜い部分が目につき、嫌悪感を抱く様子が描かれている。また、同年に雑誌に掲載された「ひと切れのビフテキ」には、以前はチャンピオンであったが、今は老ボクサーになり、お金のためにボクシングをやり、肉体的な衰えのために若い相手に試合に負けて自己嫌悪感を抱いてしまう様子が描写されている。そしてついには、酒の力を借りてまで創作活動をするようになった。

以上のようなことが、「白い論理」の影響をいっそう深刻なものにしていった。そのように１９１１年と１９１２年は、ロンドンにとって精神的にも肉体的にも最悪の状態にあり、長期にわたるジョン・バーリコーン（酒）の影響がそれを加速、増幅し、時には、死を意味する「鼻のないやつ」が出現した。

Ⅳ　作品の中の「白い論理」

「白い論理」の始まりと内容について、ロンドンは次のように記述している。これによると、「白い論理」とは、酒がもとで起こる精神的なしつこい幻影に基づく悲観主義であり、処方箋はその酒を飲み続けることである、ということが分かる。

> だが、代金は支払わなくてはならない。ジョン・バーリコーンがそろそろその徴収を始めた。しかもその徴収は、肉体的からではなくむしろ精神からであった。例の長い病―まったく知的な病気だったのだが―それが再発したのだ。長らく静まっていた昔の幻影が、再び頭をもたげたのだ。ところが今度のは、また別のもっと執念深い幻影であった。昔の幻影は、そもそも知的なものであり、健全で正常な論理によって忘れ去られていた。ところが、今度のは、ジョン・バーリコーンの白い論理によってよみがえった幻影であり、ジョン・バーリコーンは、自らがよみがえらせた幻影を決して眠らせてなどおかない。酒がもとで起こる悲観論というこの病に打ち勝つには、ジョン・バーリコーンが約束はしても決して手わたすことのない鎮痛剤を求めて、さらに酒を飲まなければならないのだ。(p.247)

ロンドンは「白い論理」の影響で、生きているのが幻想で、死というものが現実であるということを以下のように描写している。人間とは、生まれてから死へと崩壊していくのが本質で、生きているのにはたいして意味がないという深刻な悲観主義が暗示されている。

> 私は知っている。生まれてこの方ずっと死へと崩壊していく体のうちに骸骨を携え、そして、顔という名の肉の外面下には、骨ばった鼻のないしゃれこうべがあることを。だからといって、ぞっとするわけではない。こわいということは、健康であるということだ。死を恐れるということは、生のほうへ向かうわけだ。しかし、白い論理ののろいというのは、人を恐れさせたりはしないということだ。白い論理という人間共通の病によって、人は「鼻のないやつ」の顔にひょうきんにもにやにやと笑いかけ、生きている幻をあざ笑ってしまうのだ。(p.255)

ついに、ロンドンは「白い論理」の正体が、アルコールの影響によって死を快楽主義に考えさせるいかさま師で、それこそ幻影であ

り、死のほうへ向かわせる性質をもっているということを見抜くのである。次の記述のようにロンドンは、「白い論理」との壮絶な闘いに勝利する。

「私が知っているのは、今のそのおまえなんだから、こわくなんかないよ。おまえの快楽主義の仮面の下では、おまえが鼻のないやつで、おまえの道は夜に通じているんだ。快楽主義など何の意味もない。それだって嘘で、せいぜい、おく病者のひとりよがりの妥協だな──」「もうあんたにはすっかり脱帽だよ！」と白い論理が口をはさむ。(p.268)

「白い論理」に対する勝利のあと、ロンドンは、考えすぎないということや、自然との共存ということを信念とするようになる。また、このことによって、彼の生命と生きる喜びとが救われたのである。

ロンドンは、過度の飲酒の影響を受けた「白い論理」に勝利したことが過分の幸運と体質の幸運によるものである、と次のように述べている。

私が生き残ったのは、個人の徳のおかげなどではなく、私がのんだくれの体質ではなかったのと、私にはジョン・バーリコーンの惨害に対して強く抵抗する組織があったからだ。そうして生きながらえ、他の幸うすき者がジョン・バーリコーンと長く悲しい道を歩んでは死ぬのを見てきたからである。 (p.271)

V　現代的意義

ロンドンは、飲酒体験を通じて自分の闘いの人生を描く以上に、飲酒体験による精神的な苦悩や崩壊について詳細に述べ、アルコールの危険性と社会的な一定の規制が必要であると訴えている。この作品の最後の章の終わりのあたりで、「これからも飲むんだ―だけど、これ以上にうまく、慎重にな」と告白している。あれほどアルコールによって生命や精神の危険性を体験し、「白い論理」状態から回復したのは偶然で幸運であったと述べているロンドンでさえ、こういうことであるのでなおさらである。

アルコールは最初、交流や自分を癒すための安易な手段として用

いられるが、その心地よさと中毒性のためにますます量と強さが増大する。その結果、長い期間を経て強い瞬間的な快楽状態になる場合もあるが、無意識のうちに多くの人が、１）肉体を痛める、２）精神がうつ状態になる、３）現実と幻影との区別がむずかしくなったり､現実を直視して主体的に感動的に生きることができなくなる。もちろん、酒の飲み過ぎのために命を落とす人間も少なからずいることは言うまでもない。

最近､｢まったく面識のない自分より弱い者に対する誰でもよい殺人」が大きな社会問題になっている。もちろん、その原因は複合的で、１）真の話し相手がいない状態による疎外感の深刻さ、２）無感動状態に起因する人間の存在の意義の欠如、３）大変な現実を直視しないで自分の殻に閉じこもり幻影の世界に生き、他人の痛みや苦しみ、そして、個々の人間の存在意義が実感できない、ことなどであろう。この作品との関連で言うと、３）の多くの人が幻影の世界に生きており、現実の世界の大切さや全体像を理解することが不可能になっていることが、特に重要である。

自分の殻に閉じこもらないで本物に接し、いろいろな人々と交流を楽しみ、困難であっても挑戦し続け、現実の世界をさまざまな視点から見て、人間個々の可能性と存在意義を実感できる感動的なロンドンの生き方とこの作品は、格差社会で人間不在の現代社会にあって、ますます光を放っている。無感動は「死」で、感動こそが「生命の源泉」なのである。

参考文献：辻井栄滋訳『ジョン・バーリコーン』（社会思想社）
辻井栄滋著『地球的作家ジャック・ロンドンを読み解く』（丹精社）
大浦暁生監修、ジャック・ロンドン研究会」編『ジャック・ロンドン』（三友社）